

## 家族

「おはよう」

どこからか聞こえてくる声にマーティは眠たそうに重い目を開け、その声の主を確かめようとした。自分の上に身をかがめて微笑んでいるクラークの顔が見えた。いつもなら、納屋に行く前にわたしを起こすようなクラークではないのに。マーティはいったい何が起こったんだろうと、必死で眠りから目覚めようとした。

「誕生日、おめでとう」

「ああ、そうだ、きょうはわたしの誕生日だったわ」クラークはいつだって、自分が真っ先にマーティの誕生日を祝っておめでとうを言うことにしていた。マーティは布団をあごのところまで引っぱりあげて、また目を閉じようとしたが、クラークの笑顔に答えずにはいらなかった。

「あなただったら、わたしが一つ年をとったのを思いださせようとして、わざわざ起こしてくれたの？」  
「さあて、年をとるのがなんでそんなに悪いんだい？ 僕は気にならないよ。特に、選択の余地がないことを考えればね」クラークはからかった。

家族  
マーティはまた微笑んだ。すっかり目が覚めていた。もう一度眠ろうとしても、それは無駄というものだった。

「ほんとう言うかね」マーティは白髪の日だつてきたクラークの髪に手を伸ばしながら言った。「わたしも、きょうの誕生日のことは少しも気にしてないの。だつて、きのうのわたしとたつた一日しか変わらないんですもの、ちつとも年とつた気にならないわ。少し寝不足ぎみだけど」マーティはちやめつけたつぷりに言った。「そんなに年とつてないもの」

クラークは笑った。「人は年を重ねると、だんだん愚痴っぽく、気むずかしくなつてくるつて言うけど……」彼はそれ以上言わず、かがんでマーティの鼻の頭にキスをする、とげのあることばを口に出したりはしなかった。「さてと、そろそろ家畜の世話に出かけたほうがよさそうだ。お望みなら、もう一度目をつぶつて、眠つてください。朝めしは僕が作つてあげるよ。今朝だけ特別に」

「そんなこと、しないで」マーティはあわててさえぎつた。「あなたが散らかした台所を、わたしが片づけなきゃならなくなるわ」

クラークはひとり笑いをしながら部屋を出ていき、マーティは手作りの暖かい布団の中で思いつきり伸びをした。彼女は急いで起きるつもりはなかったが、クラークの帰つてくる頃までに、朝食の支度をすませようと思つていた。

〈きょうは、わたしの誕生日だわ〉マーティは心の中でつぶやいた。年をとつたという感じはしなかったが、突然、なんだかずいぶんとたくさんの誕生日を過ごしてきたような思いにとらわれた。実際、四十二歳になつていた。(四十二歳)マーティはどんな気持ちになるか、心の中でくり返し言つてみた。(変ね、こんな年でもちつとも気にならないわ)本当にきょうの誕生日は、三十歳や四十歳の時みたいに気持ちの上でショックを受けることはなかった。四十歳になるのがどんなにいやだったか！

四十になる頃には、体が衰えきってしまふような気がしていた。それなのに、四十二になったいま、正直言つて三十、四十のあの記念すべき区切りの時より、老いたという気分にはなつていなかった。

（四十二歳ですつて）マーティはもう一度心の中でつぶやいたが、いつまでもこの年齢にこだわつてはいなかつた。その代わり、きょう一日に予定されている出来事を考えていた。誕生日というのは家族を意味していた。自分の周りに家族が集まるのを、マーティはどれほど楽しみにしていたことか！ 子どもたちが幼かつた頃には、自分が「誕生日の仕掛け人」だつた。しかし、それぞれが成長して大人になつたいまは、マーティ自身が楽しむ番だつた。去年はナンドリーがお祝いの食事を用意してくれたとクリーが言つたが、マーティははつきりと覚えていなかった。年月がごちゃまぜになつてはつきりしなくなつていたが、（そう、確かにクリーの言うとおりでつたわ）とマーティは思った。

きょうは土曜日なので、誕生日のお祝いは夜ではなく昼間することにしていた。マーティはそのほうがうれしかつた。いままでは子どもたちが学校から帰つてくるのを待つて、それから牛の乳しぼりをしたり家畜の世話をするまでのあいだのせわしない祝いの食卓だつたが、昼のほうが充分時間が取れる。きょうは午後のあいだ中、たつぷり時間をかけておしゃべりしたり、孫たちの相手をして過ごせるのだ。

これからはじまる楽しみを考えただけで、マーティはワクワクして、眠けなど吹き飛んでしまった。布団をはがしてベッドの縁に座つて伸びをすると、窓のところに歩み寄つた。マーティは六月の朝の美しい空を見あげた。昨夜のにわか雨で、すべてが新鮮ですがすがしく見えた。一年中でいちばん美しい季節だわ！ 数多くの植物が育ち、夏がすぐそこまで来ているとわかつていたが、それでもまだ

空気には春のなごりが感じられる。マーティは六月が好きだった。そして、この素晴らしい月に自分を産んでくれた母親に、あらためて感謝するのだった。

マーティの思いは、また子どもたちのことへと戻っていった。ナンドリー、ナンドリーとその家族。ナンドリーはいまでは四人の子持ちになっていて、本当に申し分のない母親だった。夫のジョシユが笑って、「十三人」も子どもができるんじゃないかとからかっても、彼女はいつこうに気にする様子もなかった。確かに、自分たちの養女であるナンドリーは、産みの母親が見たら本当に誇りに思うにちがいないかった。それから、ナンドリーの妹で、もう一人の養女クリー。そのクリーと、牧師をしている夫のジョウ。クリーも子どもが好きだったが、マーティの思うところ、本人は決してそうは言わなかったが、いまのところ家族が増えるのを望んでいないようだった。ジョウ牧師はいまだに、もっと神学校で訓練を受けることを夢見ていた。マーティとクラークは、わずかばかりのお金をブリキの缶に取り分けていて、徐々に貯まった資金を、さらなる勉学の費用の足しにしておらおうと思っていた。マーティは一日も早く二人の夢がかなうことを願っていた。ジョウとクリーには、エッサー・スーという名の幼い娘が一人いた。

三番目の娘ミッシーのことを思いだすと、マーティの顔から微笑みが消え、目が潤んできた。ああ、どんなにミッシーに会いたいことか！年月がたてば、愛する者と別れた寂しさも少しずつ薄れるだろうと思っていたが、そうはならなかった。いつでも心の奥底からミッシーに会いたくて、胸が痛くなるほどだった。〈ただ……ただ〉マーティの思いはさらにふくらんでいった。〈ただ、ほんの少しでいいから、ミッシーとおしゃべりができさえしたら。ほんのひと目でいい、あの子に会えさえすれば。

ミッシーの子どもたちを、自分のこの胸に抱くことができた。ただ、ミッシーが元気で、幸せに暮らしているのがわかりさえすれば、しかし、この「さえすれば」という思いは、マーティの心を悩ますだけだった。自分はこの地において、ミッシーは何日も何日も旅をつづけていかなければならない、遠い西部にいるのだから。それでも、マーティはミッシーに会いたかった。あの子は自分の血を分けた子どもではなく、クラークとエレンの娘だったが、あらゆる意味においてマーティはミッシーを自分の娘だと言いきることができた。ずっとずっと以前にマーティの心をとりにし、生きる意味を与えてくれた、あの妖精のような顔をしたちっちゃな女の子は、絶対にマーティのミッシーだった。(ああ、あなたがいなくてとても寂しいわ、ミッシー) マーティが窓におでこをつけてそっとささやくと、涙が一粒こぼれて窓の縁にほとりと落ちた。(あなたに会えさえしたら……) しかしマーティはそれ以上言わなかった。

前庭の向こうにクレアとアーニーの姿が見えた。二人ともいままでは一人前の大人になっていたが、何年たっても小さな少年のようなところが残っていた。マーティの初めの夫クレムを知らない人たちは、二人があまりにも似ていないので驚くのだ。クレアは日増しに父親のクレムに似てきて、外見も行動もそっくりで、大きく、筋肉質で、人をからかうのが好きで、天真爛漫な青年になっていた。また、背が高くて色黒のアーニーは、クラークに似て整った面立ちで、繊細な性格だった。二人は仲良くしたり、からかったり、けんかをしたりしながらも、お互いなしには生きていけないようだった。二人は笑いながら牛乳の缶を取りにやって来て、クレアが、いつでもしゃべっているのは彼のほうなのだ。アーニーは昨夜の集まりでの出来事を何か話していた。アーニーは近所の人たちの集まりに

それほど関心がないようだったが、クレアは一度も欠席したことがなかった。クレアが不運な出来事をおもしろおかしく話して聞かせるので、アーニーも釣られて笑っていたが、彼が何度も「気の毒なルーじいさん！ ルーじいたら、かわいそうに！ もしそれが僕だったら、死んでたよ」と言っているのがマーティの耳に聞こえてきた。クレアには「気の毒なルーじいさん」に同情している気配はまったく見られなかった。彼は心の底から楽しんで話しているようだった。息子たちがドアの近くまでやって来たので、マーティは窓を離れ、ゆっくりと着替えはじめた。朝食の支度にかかるまでに、まだたつぷり時間があつた。二人はこれから乳しぼりに出かけていくのだから。

マーティは長い髪をブラシですいて、そのやわらかな髪を結びあげた。まだふさふさと量感のある髪をしていた。多くの年配の女性の髪が薄くなっているのに気づいて、ひそかに気の毒に思ったりすることがあつた。とにかく、自分はまだその点では心配する必要もなさそうだ。事実、白髪だつてほとんど目につかなかつた。クラークはそうではなかった。こめかみのあたりはすっかり白くなって、全体にも白髪が目だちはじめていた。(あの人の場合、すてきに見えるわ。むしろ上品で男らしいもの) マーティはそう思っていた。

のんびりと髪をピンでとめながら、マーティはまだ心に浮かぶ一つ一つに思いをめぐらせていた。誕生日というのは、思い出にひたるには絶好の機会だつた。ようやく髪を結びあげると、マーティはベッドを整えて部屋を片づけた。

寝室を出ると、階下からコーヒーの香ばしい香りが漂ってきた。まさか、クラークが冗談で言つたことを実行したんじゃないでしょうね。マーティは最初にそう思った。いいえ、ちがうわ、あの人

が穀物倉に行くのを見たばかりですもの。マーティはもう一度匂いをかいでみた。まちがいなくコーヒーの香りだった。しかも入れたての。

好奇心いっぱいばいのマーティは、焼いたベーコンと朝食用のマフィンの匂いまでかぎあてて、鼻をぴくぴくさせながら急いで台所へ入っていった。

「あら、母さん。びっくりさせようと思つてたのに！」

それはエリーだった。

「まあ、エリーったら」マーティは言った。「ほんとに、びっくりしたわ！ いったい、こんなに朝早くからわたしの台所で動きまわっているのがだれなのか、考えもつかなかったもの」

エリーはニコツとした。「ルークは母さんにベッドで食事してもらおうつて言つたけど、わたしは母さんに気づかれずに朝ご飯の用意なんてできっこないのはわかつてたわ。でも、母さんが下に降りて来る前には、なんとか支度ができるかなつて思つたの」

マーティはテーブルに目をやった。洗いたてのテーブルクロスがかけてあり、その上にお皿が並べてあつた。真ん中には小さな器に野バラが生けてあり、ナイフやフォークがお皿の脇にきちんとセツトされていた。

「もう、すっかり用意ができてるのね。それに、とてもすてきだわ、エリー。あそこにあるバラもいわ。おなかを満たさなくても、座つて目を楽しませてもらうだけで充分なくらいよ」

エリーはうれしそうに頬ほおを染めた。「ルークが、牧場と反対側のほうに行つて取つてきたの」

マーティはすぐそばにあつたバラに鼻をうずめると、深呼吸してその香りを楽しんだ。愛のこもつ

た家族の心くばりを思うと、特別に芳うらはしかつた。

「ルークはどこ？」 マーティは身を起たすと、こう聞いた。

「わたしは言わないほうがいいみたいよ」 エリーは答えた。「でも、遠くに行つたんじゃないから、食事には充分間に合うように帰つてくるわ。みんなが来る前に、座つてコーヒーを飲むのはどう？」

「いいわね」 マーティは微笑んだ。自分が単に誕生日を迎えた主人公というより、まるで女王さまにでもなつたような気がしてきた。

エリーはマーティにコーヒーを持つてくると、またストーブの上の料理に目をくばりに戻つていった。マーティはゆつくりとコーヒーをすすりながら、カップの縁へりに若い娘を眺めた。いままで、エリーがこんなにも大人になつていたなんて、気がついていたかしら？ まあ、この子はすっかり一人前だわ！ いまに、自分の台所で料理がしたいつて思うようになるわ。そう考えると、マーティは少しばかり心が痛んだ。もう一人、自分の娘を手放すことに耐えられるだろうか？ しかも、末の娘を？ 〈台所に立つのが自分だけになったら、どんなに寂しいだろう！〉 ミツシーが行つてしまつてからのこの年月、エリーが生活を穏やかで活気に満ちたものにしてくれたのだ。エリーまでもがいなくなつてしまつたら、自分はどうしたらいいんだろう？ そうよ、ついこないだマーが言つてたわ、エリーがとてもすてきな娘になつたつて。マーティもそのことはわかつていたが、もうしばらくのあいだだけ他の人は気づかないでほしいとひそかに願つていた。でも、ひとたび他の人が気づいて、ささやきが聞こえはじめれば、時を戻すことはできなくなる。あつという間にわが家の居間は若い求婚者でざわめくようになり、やがてそのうちの一人がエリーのハートを射止めることになるだろう。



もう少してマーティの目から涙がこぼれそうになった時、男たちが納屋から帰ってきた。クレアが最初だった。

「やあ、母さん、けっこういかしてるじゃない……の割には」彼はからかってこう言うと、自分のほかけた冗談に満足して大笑いをした。

アーニーは当惑した様子で言った。「もう、クレアったら、あんたのくだんない冗談なんか、ちつともおもしろく……」しかし、クレアはアーニーの背中をピシャツと叩きながら、陽気にこう言った。「ねえ母さん、息子を産む時、こいつに陽氣の骨をつけるの忘れたんじゃないか？ 笑い方さえ知らないんだぜ、こいつは」

クレアは今度は妹にほこ先を向けてからかった。「おい、まだいい匂いがしてるじゃないか。きょうはまだ焦がしてないのか？」

エリーは声をたてて笑った。彼女はクレアの冗談には慣れっこになっていた。それにエリーは上の兄さんをとて愛していたし、また兄さんは彼女のためならどんなことでもしてくれるにちがいないかった。クレアはエリーの髪をクシャクシャになでると、食事の前に手を洗いにいった。エリーは髪をもとどおりにきちんと直すと、スクランブルエッグを皿に盛りつけはじめた。アーニーは洗面所自分番が来るのを文句も言わずに待って、ようやくマーティのところへやって来ると、「誕生日おめでとう、母さん」と肩に手を置いて言った。

「ありがとう。ほんとに、素晴らしい一日になりそうだわ」

「すぐに、みんなでクリーの家に出かけなきゃ。やれやれ、ナンドリーのがきどもは、いつ会っても

うるさいんだから。『アーニーおじちゃん、お馬になつて』、『アーニーおじちゃん、抱っこして』、『アーニーおじちゃん……』

「でも、けっこう自分でも楽しんでるのよね」エリーがさえぎつて言った。

アーニーは反対もせず、ニコツと笑つただけだった。マーティもエリーの言うとおりでと思つた。アーニーは子どもたちが好きなのだ。

その時、クラークがタオルで手をふきながら台所に入つてきて、あたりを見まわした。

「おや、わが家の全員がほとんど揃つてるようだね。わたしを待つてたのかな？」

「そう、父さんはここまでたどり着かないんじゃないかと思つてたときさ」クレアが、目の荒い農場用のタオルをアーニー目がけて振りまわしながら答えた。

「兄さんたちだつて、たつたいま来たばかりよ」エリーが言った。「だから、だれも待たせてないわ、父さん」

男たちが手を洗い、ひとふぎけたあとでそれぞれの席に着き、マーティも自分の場所に椅子を移動してくると、エリーは焼きたてのベーコンの入った大皿をストープのところから運んできた。マーティは空になっている席を見た。「ルーク」彼女は言った。「ルークがいないわ」

「まだ寝てるのか？」時どき朝寝坊を決めこむルークを知つていて、クラークが聞いた。

「あの子はもうじき帰ってくるわ」エリーが言った。「たぶん、先にはじめてほしいんだと思うけど」  
「でも……」マーティは賛成しかねていたが、ちょうどその時、網戸のボタンと鳴る音がしてルークが飛び込んできた。髪は風に吹かれてクシヤクシヤになり、急いで走つてきたせいで顔は紅く染まっ

ていた。マーティは自分の「坊や」の姿を見て心が躍った。ルークは彼女の、やさしく穏やかで、夢多き秘蔵っ子だった。十五歳になったルークは、他の子に比べると小柄で、まじめで思慮深い茶色の目をしていた。マーティは、わたしのルークのようにこんなに温かで、思いやりのある目をした人を見たことがないと思っていた。

「ごめんなさい」息を切らせながらこう言うと、ルークは自分の席に着いた。

クラークはただうなずいただけだった。しかしこのうなずきの中に、息子に対するクラークの愛が込められていた。「手を洗ってくるかい？」

「お祈りが終わってからにする。そうすれば、食事がさめてしまわないでしょ」  
「大丈夫、食事は充分待つてられるよ。さあ、行っておいで」

ルークは急いで席を立つと、手を眺めながら出ていった。その手はところどころ赤く傷ついていた。すぐにルークが戻ってくると、家族は静かに座ってクラークの朝の聖書朗読に聞き入り、そのあとの祈りに心を合わせて祈った。

今朝のクラークの祈りには、家族の母親への、また長年にわたる自分の伴侶への特別な感謝の祈りが含まれていた。さらに彼は、マーティが本当に神さまの特別な恵みを受けるにふさわしい者であることを覚えていてくださるようにと祈った。ずっとずっと昔に、まだ自分が傷つき、当惑し、いやいやながら花嫁になったころのクラークの祈りを、マーティは思いだしていた。その時もクラークは、彼女に神さまの祝福があるようにと祈ってくれた。そしてそのとおり、神さまは恵みを与えてくださったのだ。この長い年月、神さまがずっとともにいてくださるのをマーティは感じていた。そして、

いま食卓に着いているこの愛する子どもたちが、神さまの恵みのなによりの証しだった。

お祈りが終わり、食べ物それぞれにまわつてくると、クレアはベーコン・エッグを頬ばりながらルークを見あげて言った。「ところで、ちびすけ。なんだってそんなに早起きしたんだい？」

ルークはちよつともじもじした。「あのね、僕、誕生日の朝に、母さんにイチゴをあげたくて。でも、今年はずよつとしかなくて、捜すのが大変だったんだ！ きつとまだ充分あつたかくなつてなかつたんだね」ルークは小さなイチゴの入った小さなカップを差し出した。

マーティはのどが詰まつて、また涙で目が潤んでしまった。お寝坊さんのこの子が、朝早く床を抜けて、わたしのために誕生日のイチゴをとりにいつてくれたのだ。マーティはミッシーがはじめた「母さんの、誕生日の朝のイチゴ」というしきたりを思いだしていた。ミッシーがいなくなつたあと、子どもたちは四、五年、力を合わせてそれをつづけてきたが、やがていけばん質のいいイチゴの群生している牧草地が切り開かれてしまうと、いつの間にかそのしきたりも消えてしまっていた。そしていま、末っ子のルークが勇敢にもそれを再現しようがなばつたのだ。

クレアは手を伸ばすと、末の弟の髪を乱暴になでた。彼の目はへよくやつたぞ、わかつてるだろ、おまえと言つていたが、口の中にはエリーの作つたマフィンがいっぱい詰まっていた。

「僕に言えばよかつたんだ」アーニーはそつとささやいた。「そしたら手を貸したのに」

マーティは、こうしていつしよに食卓を囲んでいる四人の子どもたち一人ひとりを見つめた。そして彼女の心は喜びに満たされ、目に浮かぶ涙の輝きのうちに愛が豊かにあふれていた。